

# 過疎地の伝統芸能の苦闘

星 野 紘

## はじめに

ここ数年来、村社会の伝統芸能（民俗芸能）が、全国各地の地域の高齢化や少子化にともなう人口過疎化の中で、その衰退の度合いを強めている情報がいろいろと報じられている。

2006年にユネスコの無形文化遺産条約が発効して、地球規模でのこの種の伝統文化に対する保存振興施策が緒に着いたところである。日本、続いて韓国では、この半世紀以上も前に、無形の文化財の保護施策を展開していた。たまたま日本の当該関係部署で仕事をしていた者の実感からしても、以前から伝統文化の衰退ぶりは指摘されてはいたものの、近年のその状態悪化のカーブは急激だと思われる。ちなみにこの主たる要因の高齢化について、最近イギリスの経済誌エコノミストが、ジャパニーズシンドロームの表題で、日本は高齢化の世界のトップを走っており、ドイツほかの先進国から日本のそれへの対応策が注目されていると報じていた。

こういった状況下で、各地の民俗芸能の多くは、先祖からの折角の伝承をどうやって後世にバトンタッチしていったら良いかに頭を痛めている。具体的にどのようなダメージを受け、またそれをクリヤーすべくどう対応しようとしているのかについて現地取材した報告をしてみたい。下伊那の掛け踊り（長野県）からは故老の頑張りを、花祭り（愛知県）からは伝統の自然な変容への模索を、黒沢の田楽（愛知県）からは学校生徒の支援は伝統的村組織との溝の問題を描写したい。生身で伝承されてきた地域の伝統芸能の有り様に迫るとともに、これらの行く末について、関係方面各位の注意を喚起することができれば幸いである。

## 1. 故老リーダーの頑張り ー下伊那の掛け踊り（長野県）からー

### （1）盆の供養と踊り

8月13日から16日頃（旧七月）のお盆には、墓参りや交通機関の都会からの帰省客のごったがえしと、全国的な風物詩が繰り広げられる。町の公園やちょっとした広場には音頭櫓がたち、赤提灯が一面に吊りさげられる。夜の盆踊りの準備だ。2009年刊の高知県一円の盆踊りを網羅した『土佐の盆踊りと盆踊り歌』<sup>1)</sup>を最近読んだが、ふたつのことが気になった。ひとつは近年旧来の口説き（音頭）の歌い手が払底して、録音テープで代用する所が多くなった。老若男女の誰でもが踊れる手軽なパフォーマンスでさえ、このように伝統が崩れている。ふたつには、新仏をはじめ亡き魂への供養の気持の熱っぽさを色濃く表現してきた土佐の風土を知ることが出来た。盆踊りの会場には新仏の遺影や祭壇

飾りが構えられる。また口説き音頭の内容も、浄瑠璃や芝居などでおなじみの情死物語や、百姓庶民の苦難を救済すべく権力にたてつき極刑に処せられた義民勇士の悲劇譚が多く、この種亡魂への悲嘆の気持やその裏返しとして怖れが反映していたのではないかと思われる。この高知県のような盆の踊りの光景はかつては全国的に見られたもので、長野県の下伊那地方の山間部にはそれが“掛け踊り”の名称で伝承をみてきた。鉦、太鼓を叩いて跳ね踊ったり、ナムアミダブツの念仏や和讃が唱えられる一方で、いわゆる手踊り形式の盆踊りもそれに混じっている。魂迎えに百八のタイマツが灯され、精霊送りの日には切子灯籠や提灯が魂送りだとして焼却されたりと、山間の村々も賑わいをみせるのである。

## (2) 高齢化率の高い村の厳しい伝承

盆の新仏供養の伝統の掛け踊りが存続してきたのは、天龍村の神原地区である。ここは、愛知県や静岡県と境を接する天竜川沿いの畳々たる山合いの地であり、地区の人口高齢化率は極めて高く、天龍村は長野県一、全国では第七番目に位置づけられているという。2009年の8月14日の盆に訪れた向方の掛け踊りは前年より中止されており、8月16日の送り行事の方も、今年是新仏の家が無かったとの理由で執り行われなかった。長松寺での念仏唱えだけを我々に見せてくれた（もっとも翌2010年には、送り行事は実施された）。ともかく、太鼓（締め）、鉦奏打を行う掛け踊りの方は、集落の青年層が払底しているためにできなくなったのだ。70代半ばの太鼓打ちの名手は、続けたい気持はあるのだが、身体が言うことを聞かないので出来ないのだと嘆いていた。向方集落の世帯数は44戸で、人口は80人という。その多くが年寄り夫婦の世帯で、なかにはひとり住まいの人もいるとのこと。小学生の方も、数名はいるが、いずれも隣町の阿南町の小学校へ行っているという。

一方、坂部集落では8月14日夜に掛け踊りが踊られていた。もっともここでは、新仏供養に該当する家々へ踊り掛けるという次第は、すでに明治時代に絶えていた。そういった次第を今日でも続けているのは、大河内集落のもののみである。上に述べた向方では、第2次大戦まではそれをやっていたのだが、ここでも新仏供養のために家々へ掛けて行って踊る次第は今ではもう行われていない。ところで、坂部集落の少子高齢化に伴う人口減少は極めて急激で、そのデーターを示すと次のようである。坂部は耕地の大変狭いところで、江戸時代よりずっと24戸の戸数を維持してきた。ただ一度、昭和34、5年頃にはダム建設などのために他地域の者が多数移り住み、68戸にまで増えたことがある。しかしその以降は、戸数はまたもとにもどり、24、5戸で来ていたのだ。ところが、平成6年にNHKの番組（「ふるさとの伝承」）で当地が取材された時は24、5戸が維持されていたのだが、それが2年前現地を訪れた時には20戸にまで減少していた。さらにまた直近の情報では、15、6戸にまで減少したという。まさにこの15年ほどのあいだの戸数減少は急激なのである。

## (3) 故老のリーダーが頑張る掛け踊り

坂部の集落は、柳田国男がかつて注目していた史書『熊谷家伝記』が残されていることで有名であり、鎌倉、室町時代以来の古い歴史を有する村である。18世紀にこの書が編纂されたが、それから間もなく『関家伝説』というのも編纂されており、その関家の18代目の後継者が関福盛さんである。80

歳くらいの高齢者であるが、今日の坂部の諸種の祭り行事を執り行うとともに、この盆の掛け踊りも先頭に立ってリードしている。今では村在住の人たちだけでは所員人数が充足できないから、都会地から盆に帰省してくる坂部の出身者やその遠戚の人たちが踊りの輪に加わっている。また年端の行かぬ小中学生たちも加わって大人たちをサポートしている。そんなわけで、今日の踊りは時に手順をまちがえたり、ぎこちない手振りを見せたりすることがあるが、その踊りの全体を修正し伝統に近づけようとしているのがこの関さんである。村在住のベテランの踊り手さえも同人の指導を仰ぎ、次はどのような演目を演ずるのかとか、どのような手振りをするのかといったことを確認しながら踊っている。歳を取ってはいても、一番しっかりとした模範的な演技を見せてくれるのが関さんだ。過去の演目や故事来歴のこともよく覚えており、こちらからリクエストを出すと、思い出してすぐそれを見せて見せ、また答えてくれる。

この坂部の関さんのように地域の伝統芸能を引っ張ってきている故老には、各地の民俗芸能でお目にかかったりする。先述の大河内の掛け踊りでは、伊藤義朗さんという90歳の故老がその掛け踊りの先頭に立ってとりしきっておられた。第2次大戦後にはシベリアに抑留されていたという方でロシア語も話される。ほかでも、例えば後述する静岡県の田楽（おくない）の分布する地域でも、旧引佐町の「寺野のひよんどり」が、村人がいったんは取りやめようとした昭和36年に、それにストップをかけたのが伊藤信次氏であったという。また旧天竜市の「懐山のおくない」の保存会長で、そこでの絶えた演目の復活掘り起こしに尽力されたのが大石伝次氏であるという。このように地域の伝統芸能の存続のために献身的につとめた人の話はいろいろと耳にするところだ。ところで、今から四半世紀前の昭和60年頃に、全国の民俗芸能の事情に精通している第一人者専門研究者が、あるシンポジウムの席上で次のように述べていたのを記憶している。「全国の民俗芸能の地には、たいてい“民俗芸能きちがい”とでも呼ぶべき人が必ずいるものですよ」とやや嘲笑気味に語っておられたが、今日ではそのような余裕のある見方は許されないような状況に至っている。なぜなら、そのような熱心な故老に今この時点で倒れられたら、それぞれの伝承はいったいどうなるのか、そのような瀬戸際に直面している伝承地が多いのである。2010年の盆に坂部の掛け踊りを再訪したが、その時関福盛氏が、もう80歳だから一歩身を引こうと言うような発言をしておられたのが気になった。確かに後進にリーダー役をバトンタッチしておくべき時点に至ったとは思われたが、実際同人が手を引いたら、その掛け踊りはいったいどうなるのであろうか、一抹の不安を覚えたのである。関さんはたいへん明朗な性格の方で、細かいことにこだわらずに村人の先頭に立って、伝統的な行事を積極的に取り組んでおられる。また正月4日の坂部の冬祭りという神楽の禰宜さんも務めていて、祭りのための水垢離を今も寒風吹きすさぶ天竜川でとっているのだという。同人は、このように希有な頑健な体力の持ち主であり、住民の先頭に立つ人として相応しい性格を有しておられる。しかしながら、こういった個人的な能力や奇特さに地域の伝統文化の行く末を託す、もうそういうわけには行かなくなっている時代のように思われる。

## 2. 伝統の自然な変容への模索 —花祭り（愛知県）—

### （1）花祭り（愛知県）の魅力

この祭りの芸能の魅力を語る前に、村社会の伝統芸能（民俗芸能）の名称が一般化しにくいという問題を考えてみたい。例えばこの“花祭り”、事実多くの一般人はこれを4月8日のお釈迦様の花祭りであるとか、何か植物のフラワー・フェスティバル行事と取り違えてしまう。確かに、どうして“花祭り”という名称に至ったかについて今のところ結論的な説明はなされていないのだが、これは神楽というものの一種で、しかもその代表的な存在ですよというふうに付け加えれば、この方面に関心を持つ者ならばある程度までは分かってもらえるのである。一般の人たちにそこまでを期待することは出来ない。それが村社会の伝統芸能の弱点である。ともあれ、山間の現地（愛知県の北東部の東栄町、豊根村、設楽町）へこの祭り見物に出かけてみると、一昼夜を要するパフォーマンス、演目次第の豊富さに圧倒される、そういう魅力を持っている。全然予備知識のない大学生とか、中国人をかつて引率したことがあったが、彼等は異口同音に「すばらしいものだ」との感想を述べていた。昭和6年に早川孝太郎が『花祭り』という大部の著書を刊行して以来、東京などの都会地から見物人が現地に足を運ぶようになり、当時そのような者を“花狂い”と呼んでいたが、筆者などもそのたぐいの輩のひとりなのかと思う。歌舞伎やオペラなどの観劇、あるいは何かの大スペクタクルの虜にされるのと同様の感慨を与えてくれることは間違いないのだ。もっとも、なにせ徹夜で演目次第が執行され、寒い冬の夜の執り行いであるから、眠たい、寒いといった肉体的な疲労を克服する精神力が要求される。もっとも演目次第の運びに集中すると面白い。厳粛な神事の次第があり、竈を据えた前庭で繰りひろげられる花太夫、宮人といった神役の人たち、それに稚児、少年、青年、壮年、老年といった年代の異なる者たちによる種々の舞いの演目があり、また鬼や翁といった面を着しての面形の舞演目もそれに続く等々、変化に富んだ演目が次々と展開される構成となっていて興味が尽きない。他方これを執り行っている人たちの側に立ってみると、その運営執行には多人数を要し、入念な準備がなされ、多端にわたる役割分担によるシステムティックな執り行いがなされている、実に大がかりな祭りなのだ。一集落だけでこれだけ大規模なものを挙げる習俗が、どうして出来上がったものなのか不思議でさえある。

### （2）伝統の自然な変容への模索

この花祭りは今日15ヶ所で行われているが、いずれも各地域の住民たちによってそれぞれ個別に実施されてきたのだ。今日の人口の過疎化、高齢化、少子化の状況は、各地域のこの花祭りの伝承にダメージを与えており、東栄町文化財審議委員で、下栗代地区の花太夫である一野瀬三紀男氏の言葉を借りれば、それは“人口飢饉”と形容されるものである<sup>2)</sup>。

数年前までは花祭りは17ヶ所に伝えられていたのだが、そのうち豊根村の山内と間黒のふたつの伝承が2007年を最後に休止となった。筆者はその情報を耳にして、“人口飢饉”状況が今日の神楽などの民俗芸能に与えている事態に警鐘を鳴らすべく、2008年に「山の芸能が危ない」という一文を書いた<sup>3)</sup>。他方、2011年1月29日のNHKテレビの総合チャンネルで、昭和30年代に花祭りに取材して放映され

た「新日本紀行」の続編といったかたちで、今日の花祭りの様子を付け加えて新しい番組に仕立てたものを放映した。この番組の観点は、花祭りの里の人口の過疎化、厳しい状況のなかにあっても、花祭りがなお将来に向かって存続している姿をプラスイメージとして表現しているもののように思われた。番組の1コマには、2007年に休止された間黒の花祭り関係者が、毎年の正月の花祭り執行の煩わしさから解放されて安堵したものの、それが無くなった今は心のなかに何かぼっかりと穴が空いたようなさびしい気分になっているという談話があった。また次のような新たな息吹を感じさせるふたつの場面もあった。ひとつは、昭和30年代にダム建設のため水没した集落曾川の花祭りが、曾川の住民たちが新たに移住して行った先の豊橋市内において、それが今も引き続き執行されている場面であった。ふたつ目は、下栗代の花祭りの保存会長金田新也氏の高校生のご子息が、本年初めて「茂吉鬼」の鬼の大役の演技に取り組み、無事成功させた場面だった。若者が今花祭りの将来に向かって積極的に取り組んでいる姿を強調しようとしていたように思えた。一見、この番組からは花祭りが今危機的状态にあるという悲観的な側面は感じさせないものであった。しかしながら先に引用した一野瀬氏の一文からは、花祭りは今はまさに正念場を迎えているというふうに認識されており、その苦難を乗り切るべく懸命に努力している様子が綴られていた<sup>4)</sup>。

したたかで柔軟なあらゆる手段を講じながら現在を乗り切ろうと考えている。たとえ世間から喝采をあげなくても良い。遠祖たちが守り抜いてきてくれた伝統の真髓を次代へ継承するために努力することを使命と考えている。

筆者のように危機的な状況を声高に叫ぶとか、あるいはNHKの番組のように、逆に伝統の継続性を楽観視するとかといった外部の者の見方とは別の、実地伝承者の冷静な対応ぶり、伝統文化継承の現実的な苦闘ぶりがここには示されていたように思う。一野瀬氏は花太夫という下栗代の花祭り伝承の最も中心的な人物であり、みずからのそういった50年間の体験をもとに変わりゆく歴史的な時代の歩みと、時々そのそれへの花祭りの対応ぶりが次のように説明されている。

思えばこの里も天保の再興以後、明治の廃仏毀釈、大恐慌、若者の多くを奪われた大戦と直後の極端な物不足と巨大な嵐に遭遇してきた。村人たちは、時に身を伏せ息を密そませ智恵と汗でやり過ぎて来たに相違ない。私たちが体験してきた五十年間でも宿花から村花への移行、舞い子への女性参加、集落外子女への舞人解放など、時代のニーズに合わせてしなやかな対応をしてきた<sup>5)</sup>。

ここで指摘されている“宿花から村花への移行”も、“舞い子への女性参加”も、“集落外子女への舞人解放”も、今日では当たり前なことと受け止められるようになっている。いずれもやむを得ない次善の策だったのだが、今日ではもう誰も異論を差し挟まないような状態となっている。衆人が容認するこのような変容は自然なことかと思われる。昔を知る者には、本来の姿が変質してしまったと嘆くところではあったが、今や背に腹は代えられないやむを得ないことだと多くの人が思い、このように

して当たり前のこととなって行く変容なのだ。ところで一野瀬氏の言う、“時代のニーズに合わせてのしなやかな対応”とは、今日の下粟代の花祭りにおいては、具体的にどのような対応ということなのだろうか。以下にそのことを見てみたいと思う。

下粟代の集落は近年まで戸数24戸であったというが、今日では戸数18戸、住民51名と減少し、小中学生は皆無になっているという。先述のような大規模な花祭り行事を実施するに当たっては、人員の確保のために様々な工夫を凝らしているという。まず花太夫、宮人といった神役の人、囃子方、衣裳着付け係り（部屋番）、会計係（会所）、焚き火などの火の管理役（柴灯番）、来賓接待役など、祭り運営執行役の者として現在26名が担当している。しかしながらこの人数は、村人の高齢化や人手不足に対応するべく、従来あった役割を廃止したり、所用人数を削減したりしてのものである。他方、舞い手の方も、そのうちの児童や生徒については、隣接する町内の集落から調達を図ったり、県内外の下粟代出身の血縁者の子弟に声を掛けて、なんとか舞い演目に必要な人数を工夫して確保しているのだという<sup>6)</sup>。

また、2011年1月8日から9日に行われた下粟代の花祭りの折りに、保存会長の金田新也氏から本年の対応ぶりについて話をうかがった。そのなかで印象に残った2点を紹介する。ひとつは、これまで休むこともなく実施してきた花祭りではあるが、毎年、今年も花祭りを実施すべきかどうかということ村人全員に対してうかがいを立てて、その上で進めているというという。この話を聞いて思い出すのは、今は中絶してしまった間黒の花祭りの関係者が次のように話していたことである。2007年に間黒集落を訪問した際、花祭り保存会総代表が話していたことは、今回花祭りを決定した20何年か前にもすでにそれを中止すべきかどうかの議論が持ち上っており、喧々諤々の話し合いの末、投票で結論を出したが、その時は1票差で存続を決めていたのだという。この話から、村の総意の取り決めのもつ重さとある意味での怖さを感じる。1票でも反対が多い結論がでると、全体としてその行事を取りやめるという結果に至り、あるいは逆に継続するということになる。金田会長は、そういう性格の村行事の運営だからこそ、注意深く事を取り運んでいるのだと理解できた。

もうひとつの話は、いくら人手不足だからといっても、極端な改変はすべきではないという言葉があり、ノートにメモをしておいた。つまり、ちょっとした綻びが、ちょうど蟻の穴から堤がくずれるという諺があるように、伝統の破綻が大きくなることを警戒しているのであった。そうならないような工夫をいろいろと凝らしているようであった。具体的な事例として、今年の花祭りの演目上演におけるふたつの配慮を述べていた。ひとつは「地固めの舞」を舞ったひとりの若者が2年間花祭りを休み、全然練習をしていなかったため、まずい舞振りを示したことを怒っていた。もうひとつは「四つ舞」の演者の人数が確保しきれなかったために、本来、採り物の3種を順次持ち変えながら3回に分けて舞わなければならない次第を、同じメンバーで採り物を変えて2回に舞うことで済ましたが、これは急場しのぎの措置であって、本来ならば避けるべきことであったと反省していた。

保存会長のこのような話から、先祖以来脈々と伝わってきた、花祭りの演技伝統の気位の高さを感じさせるとともに、なんとかして破綻をきたさない程度のほころびの修繕（改変）を、どのようにしてやれば良いのかについて、神経をとがらせていることを感じさせた。ともかく伝統の自然な変容の落としどころをもとめながら年々伝統の維持存続につとめていることを知るのである。

### 3. 学校生徒の支援は伝統的村組織との溝を乗り越えられるか - 黒沢の田楽（愛知県） -

#### （1）黒沢の田楽の魅力（愛知県）

今から40年ほど前の昭和50年に、当時の愛知県南設楽郡鳳来町七郷一色（現在新城市）黒沢の田楽（おくない）の一行が上京し、日本青年館のホールの舞台で公開された（全国民俗芸能大会）。その時当傳承には、単純な短い所作ながらも精緻なユーモラスな芸能表現がなされていることに感じ入ったものである。そんなことで、現地黒沢の峰福寺阿弥陀堂での祭りをも見学したこともある。それが中止されるらしいとの情報を得て、近年、2008年2月3日に、また2011年の2月6日にと様子をうかがいに現地を訪れた。幸いなんとか継続されていることに胸をなでおろした。大変奥まった山中のわずか7戸だけの集落に傳承されてきたものである。現地にたどり着くには、JR飯田線の三河大野駅あたりで下車して入るのが近いのかと思うが、豊川とか豊橋あたりでレンタカーを借りて行くのがもっともてっとり早かった。集落の所在地まで麓から数百メートルと海拔が高いので、2008年の時には黒沢の家々は真っ白に雪で覆われていた。全部で36番の演目が阿弥陀堂内で演じられる。神楽風のものがあり、剣や矛、杵を手に魔払い、祭場の結界を趣旨とした種目、翁、三番叟といった仮面を着してのものと続く。さらに稲作や畑作、それに養蚕の豊穰をまじなう田遊びの諸次第がある。なかでも上記したような感動的な場面を見せるのが田遊びの所作である。全国的にみても田遊びの所作は概して象徴的である。例えば、立て据えた鉾うち太鼓の皮面を田圃に見立てて、餅鍬などで土起こしをしたりと稚戯にも等しい単純な所作で笑いを誘う。ここ黒沢の場合には、そういったことの上に作り物に大変精をこらして、他の傳承地にはない奇抜なアイデアがこらされている。例えば、「小豆とり」と「大豆採り」の次第では、小さな方形の木片で小豆や大豆の実の作り物を沢山こしらえ、それらをクロモジの木の枝一杯にとりつけて、天井板にバッチ！バッチ！と打ち付ける。するとバラバラとそれぞれの木片が床に落下する。参集した人々はわれ先にとそれを拾い集める。阿弥陀様の前に供えたり、自分の家にもちかって自宅の成りものが豊作になるようにと願って取っておくとのこと。また、女竹や木、紙などで麦や粟などの実りの秋を迎えた物、それにそれらを刈り取る鎌や掘り起こすための鍬などの農具のミニチュアを作り、収穫する所作を見せる。さらに作り物ではないが、次のような実りの豊かさを示す象徴的演出もあった。それは「いなほら」という米が沢山とれたことの所為だ。太鼓の上にひとりの者が乗って身をかがめる。彼の頭上には白飯を一杯に盛った器がささげられている。側の扇を開き持った者が、“いなほらははやすほど、高くなるらん”と言葉をかけると、うずくまっていた者が徐々に身体を起こして行き、最後にさしあげた白飯の器が天井板に届きそうになる。いかにも本年の実りが豊穰であったこと、人々がどんなに喜んでるかを表現している。これまた同様の表現が他には見られない見事なものだ。

#### （2）傳承危機と小学生のサポート

平成15年と18年の2回、黒沢の傳承者たちは阿弥陀堂の祭り芸能の催しの中止を取り決めた（もっとも周囲からの励ましや支援を受けて、その後また考え直して2月最初の日曜日の祭りをなんとか継続してきている）。その理由は傳承者たちが高齢化したことと、彼等の子息たちの誰もがみな山下の

町場へ移住してしまっただけで田楽の後継者がいなくなったからである。2008年の祭りの時には6人でこれを執行していたのだが、3年後の2011年には、79歳、67歳、66歳、59歳の4人に減っていた。ただ今回は地元の近くの集落の大学卒業生が参加して手伝って演目1番を舞った。この若者への当事者たちや周囲の人たちの期待ぶりの視線が感じられた。この人が今後伝承者として定着すること、あともうひとり、ふたりの同様の若者の参加が切望される場所である。今の黒沢田楽に、前(1)項で述べたような魅力が失われているわけではないけれども、やはり伝承者の減少は芸能次第の運びに悪影響を与えていることは否めない。阿弥陀堂のなかでの執り行いとはいえ、戸を開け放しのままの所なので寒気が吹き込み、年輩実演者は早く次第をやり終えようと急ぎ足となる。次第の細かい部分に至ると端折ったり、時に次第順序を失念したり、長い詞章を省略したりといったことが見受けられた。

ところで彼等が当該伝承を投げ出してしまわないようにと見守り、伝承者たちのよき相談相手となってきた林正雄氏の存在は、田楽の存続に大きな役割を果たしてきた。愛知県教育委員会の文化財係長を務められたり、学校の校長先生をされたり、鳳来町の文化財審議委員もなさるなど地元の黒沢田楽の伝統の持続のために人一倍精魂を傾けてこられた方だ。同人が提供してくださった当田楽が今日まで歩んできた経緯を見てみよう。昭和12年の第2次世界大戦への地元民出兵による田楽の中断、戦後の復活、昭和30、40年代の高度経済成長期を経過し、鳳来町や愛知県の無形の文化財指定の措置受け、その後昭和53年に、近隣の鳳来寺田楽、田峰田楽とともに重要無形民俗文化財にされた。そのように貴重な文化伝承であるとの価値評価が一般に広まりつつあったのだが、先述したような地域の過疎化にともなう伝承の思わしくない状態が徐々に現れ始めた。そんななか、平成3年以来、ここ20年間ほど小学校生徒による黒沢田楽の技芸の体験修得活動が積み重ねられてきた。ところがこれにも曲折があり、最初黒沢集落近くの一色小学校の取り組みだったのだが、平成14年に同小学校が麓の大野の方の東陽小学校に吸収合併された。もっとも学校関係者の理解を得てこの田楽伝承活動は継続実施されて今日にまで続いている。と同時に小学生による技芸伝承の成果は田楽の祭りに活用され、生徒たちのそのサポートぶりは今や田楽存続に欠かせないものとなっている。祭りの日の朝生徒たちは阿弥陀堂に馳せ参じ、引率の先生とともに集落の大人たちの田楽執行を、笛などの楽器伴奏を受けもつかたちで行う。高齢の大人たちは多くの年若い小学生たちの顔をみながら、励まされるようにして諸次第をこなして行く。一色小学校時代以来参加してくれている演奏歴の長いベテランの先生方もこれに加わっている。彼等が役目を終えて阿弥陀堂を立ち去る時に、代表格の大人の実演者が丁寧に頭を下げて礼を述べていたが、もういまとってはこういった小学生たちの支援がなければ、この祭りを執行して行けないような状況となっているのである。

### (3) 学校生徒の支援は伝統的村組織の溝を乗り越えられるか

黒沢田楽の例年の祭り挙行のために、小学生と学校の先生とがひとつの役割を果たしている事例は上記の通りである。ただしそういった外部からのサポート体制だけでは、伝統伝承文化の真の再興には繋がって行かない問題があることについて、旧静岡県天竜市神沢(現在浜松市)のおくない(田楽)のこれまでの経緯を振り返って見てみよう。神沢の田楽は黒沢田楽と類似の伝承で、浜名湖の北東部の山間、そして愛知県の方にかけて分布しているもので、田楽、猿楽などの中世芸能の面影を伝

える諸演目が執り行われる。正月に集落の阿弥陀堂、観音堂などの仏堂にて、五穀豊穰など新しい1年の吉祥を期して実施される。かつて奈良、京都などの大寺院で執り行われた修正会、修二会の結願の日の芸能競演の催しに脈を引いているものであろうと推されている<sup>7)</sup>。ところで黒沢、神沢などの同類伝承7ヶ所の祭日は三日堂とか八

表5-6 日送りのおこない堂

堂	名	所在地	寺院名	世襲組織
1	三日堂	引佐町寺野	宝蔵寺観音堂	宮講12戸
2	四日堂	引佐町淡川	万福寺薬師堂	宮講25戸
3	五日堂	天竜市懐山	新福寺阿弥陀堂	禰宜大石家
4	五日堂	天竜市神沢	満福寺阿弥陀堂	宮子(宮講)14戸
5	六日堂	愛知県南設楽郡鳳来町七郷一色黒沢	峯福寺阿弥陀堂	全戸(6戸)
6	七日堂	浜松市滝沢町	安楽寺大日堂	大禰宜・小禰宜
7	八日堂	引佐町川名	福万寺薬師堂	大禰宜・小禰宜ほか

(図5-6と対応。6は伝承がほとんどないので推定による。懐山は現在は三日堂と呼ばれているが、本来は五日堂であった。)

日堂などと呼ばれ、それらが日送りに催されてきた形跡がある。その概要と所在マップが『静岡県史 資料編25 民俗三』に掲載されているのでここに転載しておく。

実は、神沢の田楽は昭和30年代後半に現地では絶えてしまい、その後昭和50年に神沢地区をも学区としていた熊中学校の郷土クラブの生徒たちにより、数番の演目が復活伝承され、かつかつではあるもののその命脈だけはなんとか今日まで続いてきていたのだ。ところで、ここ数年前から、旧来の田楽所在地の西神沢集落出身の石野利重氏(現在浜松市街地に在住)を中心とした数名の方々が、半世紀以前の神沢の田楽を現地においてなんとか復活出来ないものかと挑戦をし始めている。しかしなかなか思い通りにはことは運ばないようである。

筆者は2008年と2009年の2回、現地を訪れて石野さんたちの話を聞いた。2008年に聞いた話では、旧天竜市の二俣町(現、浜松市)の清竜中学校の総合学習の授業のなかで、神沢田楽の技法についての体験学習プログラムが組まれていて、石野さんたちはその実技指導にあたっているとのことであった。2009年に、静岡県教育委員会の事業の一環に神沢の田楽の映像記録の作成プロジェクトがあって、石野さんたちは、それを半世紀前まで行なわれていた伝統の祭り五日堂というかたちで再現して記録化してもらおうと目論んでいた。2009年の1月5日に西神沢にある老人憩いの家(そこに昔の阿弥陀像が安置してある)で記録作成が行なわれるとの情報を得て現場を訪れてみたが、当初の目論見はほとんど成功していなかった。その場所には神沢の一般住民はほとんど集まっておらなかった。映像記録の対象となったのは現地の人ではなく、清竜中学校で体得学習を行っている中学生の21名であり、しかもその中学生のなかには神沢出身の生徒は誰も含まれていなかった。終了後石野さんは、事前に地元の自治会長さんの方へ良く根回しをしておくべきだったと反省していたが、地域の伝統行事が一度とだえてしまうと、そう簡単には再興できるものではないことを目のあたりにみせてくれたように思った。ふり返って考えると、黒沢の田楽が小学生のサポートを得て続けられていることとはいえ、その存続の問題は結局集落の大人たちの肩にかかっていることなのかなと思ってしまう。

石野さんたちが、2008年に、翌年の五日堂復活のため目標としていたことを詳しく見てみよう。田楽所要の演目次第をこなすためには、必要人数が13人ほどで、最低でも9人(禰宜1人、楽器奏者4人、舞い手4人)確保せねばならないところだが、その時点で調達確実な者はわずか3人だった。残りの6人をなんとか1年間かけて探し出すということだったのだが、それが出来なかったのである。結果としては、先述の21人の中学生でその場をしのいだということである。ところで半世紀前までの五日堂の人員組織体制は、禰宜家(1軒)と宮講(みやご)という神沢地内の世襲の家の者たちに

よって構成れていた。宮講は西神沢地区に20軒（神歌を担当）、六郎沢地区に20軒（舞いの担当）、峰神沢地区に20軒（舞いの手伝い）の計60軒存在していたというが、第2次大戦前後からそれが減少し、これが中絶となった頃の昭和36年には14軒にまで落ち込んだという。その後昭和50年に天竜市教育委員会の説得があって、当時なお残存していた宮講の家の人たちをも含めて神沢田楽保存会が結成されたのだが、五日堂の祭り行事は復活することなく、熊中学の郷土クラブの生徒たちに下駄をあずけるようなかたちで引き継いだのであった。

2008年に聞いたところでは、宮講の家の方が、西神沢地区にひとり、六郎沢地区に0人、峰神沢地区にふたりとわずかに計3人だけとなってしまったのだという。なお禰宜家の石野邦五郎家は現存していて、その地内に祭りの時に用いられた井戸も残されている。さらに太鼓や鬼面などの用具類もきちんと昔のままに保存されているのである。このようにかつての祭り運営組織などが壊滅状態になってしまっているわけでもないけれども、なかなか時計の針を昔に戻すことが出来なくなっている。そういうもどかしい状況の辛酸を今、石野さんたちは嘗めているのである。中学校の生徒への伝承を通じて果たしてどこまで、この間に歩んできた滅びの道を後戻りさせることができるのか、ここにひとつの壮大な実験が試みられているということだろう。

#### 《注》

- 1) 『土佐の盆踊りと盆踊り歌』（2009 高知新聞社発行）
- 2) 『伝統文化』N034（2010年 財団法人伝統文化活性化国民協会発行）所載
- 3) 『民俗芸能研究』44（2008 民俗芸能学会発行）所載
- 4) (2) に同じ
- 5) (2) に同じ
- 6) (2) に同じ
- 7) 『静岡県史 資料編25 民俗三』（1991 静岡県発行）所載

[Summary]

## Struggle of Traditional Performing Arts in Depopulated Areas

HOSHINO Hiroshi

In the last few years, there have been reports that the decline of traditional performing arts (folk performing arts) in village communities is becoming greater in the midst of decrease in population in various regions throughout Japan due to the ageing of communities and the decline in the number of children.

As UNESCO's Convention for the Safeguarding of the Intangible Cultural Heritage went into effect in 2006, measures to promote these traditional cultures have been launched on a global scale. More than half a century before this, Japan began to develop measures to protect intangible cultural heritage. This has been followed by Korea. As someone who was working in a position directly related to this matter, the present author thinks that the worsening of the situation is becoming more severe recently even though the decline of traditional cultures have been pointed out from before. According to a recent article in *The Economist*, Japan is at the head of the ageing society, which is the main factor in this phenomenon, and Germany and other developed countries are paying attention to how Japan will respond to this situation.

In such circumstances, many people in various areas are considering how the tradition of folk performing arts that they have inherited from their ancestors can be passed on to future generations. In this paper, the situations of *kakeodori* of Shimo-Ina (Nagano prefecture), *hanamatsuri* (Aichi prefecture) and *Kurosawa-no dengaku* (Aichi prefecture) are examined to see in concrete terms what damages have been made and what can be done to countermeasure them. By closing in on the traditional performing arts of these areas that have been transmitted physically, by word of mouth and bodily movements, it is hoped that it may be possible to call the attention of all concerned to the future of traditional performing arts in these areas.

Research and Reports on Intangible Cultural Heritage  
Number 5  
2011

Publisher:

National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo  
13-43 Ueno Park, Taito-ku, Tokyo, 110-8713, Japan

無形文化遺産研究報告 第5号

平成23年3月26日印刷

平成23年3月31日発行

編 集	独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所 『無形文化遺産研究報告』編集委員会	
編集委員	無形文化遺産部長 無形文化財研究室長 音声・映像記録研究室長	宮田 繁 幸 高 桑 いづみ 飯 島 満
発 行	独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所 〒110-8713 東京都台東区上野公園 1343 電話 03 (3823) 2241	

© 独立行政法人国立文化財機構  
東京文化財研究所 2011

National Research Institute for  
Cultural Properties, Tokyo